

1. 心とからだをつなぐもの

白血球の自律神経支配

顆粒球 AdrR アドレナリン受容体

細菌を貪食して処理する

白血球

リンパ球 AchR アセチルコリン受容体

抗体などを産生して免疫をつくってからだを守る

< 自律神経の二重支配 >

交感神経系 (アドレナリン)

上昇
拡張
促進
弛緩
蠕動
抑制

血圧
気道
心拍
胃
消化管
免疫

副交感神経系 (アセチルコリン)

下降
収縮
緩徐
収縮
蠕動
促進

顆粒球

リンパ球

交感神経優位か 顆粒球増多

肩こり、腰痛、便秘、食欲不振、
高血圧、痔、歯槽膿漏、不眠

副交感神経優位か リンパ球増多

鼻水、身体が痒い、蕁麻疹、
元気が出ない、アレルギー疾患

消炎鎮痛剤 (インドメタシン、アスピリン、サリチル酸メチルなど) の投与は、交感神経緊張状態をもたらす。交感神経系はほとんどあらゆる分泌現象に対して抑制作用を発揮するので、神経刺激を伝達するための分泌をも抑制し、そのために知覚神経の働きがブロックされる。痛みを感じなくなるのはこのため。

その一方、交感神経の刺激は、頻脈や高血圧を生じいつも疲れた状態になる。そして顆粒球の増多も出現してくる。過剰になった顆粒球は胃や関節も含めた全身のあらゆる組織を破壊し始める。

顆粒球の増多、交感神経系優位の状態

潰瘍性大腸炎、慢性関節リウマチ

リンパ球の増多、副交感神経優位の極限

活力低下、自信喪失、うつ症状

C型肝炎の治療

インターフェロンの投与

顆粒球の減少

うつ症状のリンパ球型

神経系 内分泌系 免疫系 の連携

多細胞生物の進化

マクロファージ

内分泌細胞

リンパ球と顆粒球

ニューロン (神経細胞)

感受 - 分泌細胞の概念

マクロファージから進化した内分泌細胞、リンパ球様細胞、神経細胞も、それぞれ細胞質内顆粒を持ち、ある刺激を感受して顆粒放出を行うという共通のメカニズムで仕事をしている。

生物は、呼吸やえさ取り行動のようなエネルギー消費する働きをする時には、交感神経を発達させ同調させている。逆に、えさの飲み込み・消化・吸収・排泄などエネルギーを蓄積する働きが必要な時には、副交感神経を進化させて同調させていく。したがって感受 - 分泌細胞の顆粒放出現象もすべて副交感神経支配になっている。この理由として分泌現象が本来排泄から進化したものであることが考えられる。

副交感神経優位の時とは、食事をしたり、休息・睡眠をとったりするときの体調であり、内分泌細胞は活性化し、インスリンなどが出る。成長ホルモンやグルココルチコイド(副腎皮質から分泌されるステロイドの一種)も副交感神経

が優位である夜間か早朝に分泌される。外分泌細胞も働き、消化液などが分泌される。リンパ球が働き、免疫能も高まる。神経伝達物質が出され、知覚神経などの働きも高まり、痛みなどに対して過敏になり、いろいろな物事に気が行き届くようになる。

逆に、交感神経緊張の時は、感受 - 分泌細胞のすべての働きは低下する。内分泌細胞、外分泌細胞の働きは停止し、血糖値が上昇し、口が渇き、リンパ球の働きは低下する。神経伝達は抑制され、周りがよく見えなくなり、知覚が消失する。無我夢中の状態である。一方、えさ取り行動に関与する細胞群だけは働きが亢進する。呼吸、循環(血圧)に関する機能であり、防御細胞では顆粒球の働きである。発汗に係る細胞もこの群れに入る。

感受 - 分泌細胞の概念 顆粒分泌と排泄現象 これらの副交感神経支配 の三つの法則によって 真の神経系、内分泌系、免疫系の連携が理解できる。

2. なぜ病気になるのか

広い意味のストレスや医療における薬剤使用上の間違いが、交感神経系を過度に緊張させ病気をつくる。

癌の原因は働き過ぎと心の悩み

1. 血流傷害と顆粒球増多

上皮再生の促進

癌化

2. 免疫抑制(傷害性T細胞の減少)

NK細胞の数は上昇するが、機能はブロックされる

交感神経緊張持続による発癌メカニズム

交感神経と副交感神経は拮抗して働いているので、交感神経の緊張は副交感神経の抑制をともなう。そのため副交感神経の支配下にあるリンパ球の働きは低下し、その結果、癌細胞を攻撃するT細胞が減少し、同じく癌細胞を殺してしまうNK細胞が機能を発揮できなくなる。このように免疫系の能力が低下し再生細胞の癌化を許す。

腰痛、肩こり、リュウマチの慢性化した関節痛などへの痛み止めの長期使用は、癌の原因となる。

つまり、これらの症状には血流傷害と顆粒球増多がその背景にあり、交感神経緊張によって引き起こされている。

そこでこの状態から逃れようとして副交感神経の反射が起こり激しい痛みが生じる。痛みとは身体の治癒反応なのだが、痛み止めはこの反射を止めて一時的に痛みを抑えるが、頻繁なその使用はこれらの症状を悪化させ、ついには癌を誘発させる。

癌から逃れるには

癌の自然退潮を促す治療法 白血球の自律神経支配に基づいた発癌原因の除去

免疫系を破壊する大量の抗癌剤投与や放射線照射を控えること

ストレスと皮膚の状態、容貌、全身的な美しさ

肩こりは病気のはじまり

いば、魚の目はなぜできる

刺絡の鍼治療で血流傷害を取り除くことで、冷え性、腰痛が治ったり、癌が縮小する

いば、魚の目も除去されたりする

口呼吸と腎炎

口呼吸は吸った空気が直接扁桃を刺激し免疫系に異常をもたらす

乳児に早く離乳食を与え過ぎることはアレルギー素因をつくり出す

あやしすぎの過保護はアトピー性皮膚炎の増加をもたらしている? - 充分泣くことで交感神経が刺激され、過剰

リンパ球体質へ偏るのを防いでいる

病気は過剰な副交感神経優位でも起こる

ストレス 交感神経優位 顆粒球増多 組織傷害 の流れと

過剰な副交感神経優位、即ち肥満や運動不足、リラックス過剰などでも病気は起こる

交感神経優位	自律神経	副交感神経優位
悪	血 流	良
少 35%	リンパ球	41% 多
多 60%	顆 粒 球	54% 少
病 気	正 常	病 気

自律神経、白血球と病気の関係

病気とは気の異常

病気は気の異常と体の異常の両方を含む - 東洋医学の概念

西洋医学は「病体の医学」と言うべきもの

3. 治療医学にある問題点

薬の開発と対症療法 of 進歩

腰痛、肩こりと痛み止め

筋力低下 血流傷害 骨や関節の変形

血流傷害は交換神経緊張を伴う現象なので、必ず顆粒球増多も同時に誘発され、骨や関節の変形が促進される。

そして、血流傷害を改善しようとする副交感神経反射が痛みをつくる。

胃潰瘍のメカニズム

胃潰瘍の消化説・酸説から顆粒球説

潰瘍形成（粘膜・皮膚）の原因

統一因子 交感神経緊張持続 顆粒球増多、血流傷害

個別の原因 1. 精神的ストレス

2. 過労や不規則な生活

3. 消炎鎮痛剤（NSAID）の長期使用

4. 細菌感染

5. 消耗

アトピー性皮膚炎とステロイド外用剤の副作用

外用に使用されたステロイドが皮膚組織に沈着して、起炎症作用を持つ酸化コレステロールに変性する

新鮮ステロイドホルモン 17-OHCS などとして尿から排泄

（抗炎症作用）

体内への停滞

酸化コレステロール

胆汁酸として肝から排泄

（起炎物質）ステロイド潰瘍、関節破壊、アトピー性皮膚炎の難治化

組織沈着

（動脈硬化、加齢促進、発癌）

ステロイドホルモン剤の体内での代謝と停滞

近年のアトピー性皮膚炎増加の理由

0歳から18歳位までは成長のエネルギーを吸収するために副交感神経優位の体調になっている - リンパ球人間

リンパ球過剰でアレルギーを引き起こす原因

排気ガス(CO2)など

運動不足や肥満

過保護

有機溶剤の吸入
金属イオンや農薬
アレルギー体質

～ は副交感神経優位からリンパ球増多を引き起こす

アレルギー発症の直接の誘因

ストレスによる血流傷害（免疫複合体の停滞）

抗原の存在（ホコリの多い家、動物の毛など）

ステロイドホルモンは起炎剤にもなる

ステロイド潰瘍という言葉からも知られるように、長期間のステロイドホルモン使用は皮膚、腸管、骨を含めたあらゆる組織が脆弱になる

気管支喘息

気管支喘息は気管の慢性炎症ではなく、抗原や精神的ストレスを体外に排泄しようとする治癒反応によって引き起こされる一過性の急性アレルギー反応

気管支喘息もアトピー性皮膚炎と同様に過剰リンパ球体質の改善が必要

アレルギー体質は、長期的にみればウイルス感染などに強く長寿の体質といえる

環境汚染の場所から逃れる

過保護な生き方を止める

口呼吸を止める

運動や乾布摩擦（しぼりタオル摩擦もよい）で身体を鍛える

井穴刺絡との出会い

浅見鉄男 - 横浜市開業医

薬漬け医療がなぜ起こるのか

消炎鎮痛剤の連続投与がもたらす交感神経緊張

頻脈、高血圧、抹消循環不全(手足が冷たい)、顆粒球増多、粘膜破壊(胃を悪くする)、関節や骨のさらなる変形、尿量低下、腎傷害、白内障、不眠、易疲労性、食欲不振、便秘、口渇、動脈硬化、狭心症、心筋梗塞、脳卒中、発癌、多臓器不全、寿命の短縮

薬の数が増えれば副作用の可能性はねずみ算的に増える

- 四種類以上の薬を飲んでいる患者は医学知識の及ばぬ危険な領域にいる

アスピリン療法の危険性 - アスピリン・ジレンマ

あるいは小児用バファリン療法 動脈硬化を進め、老化を促進するあらゆる反応が生体内で進行する

パーキンソン病

潰瘍性大腸炎の難治化

難病 - 特定疾患の種類

ベーセット病	多発性硬化症	重症筋無力症	全身性エリテマトーデス	スモン
再生不良貧血	サルコイドーシス	筋萎縮性側索硬化症	強皮症・皮膚筋炎及び多発性性筋炎	
特発性血小板減少性紫斑病		結節性動脈周囲炎	潰瘍性大腸炎	高安動脈炎
バージャー病	天疱瘡	脊髄小脳変性症	クローン病	悪性関節リウマチ
難治性の肝炎のうち劇症肝炎		パーキンソン病	アミロイドーシス	後縦靭帯骨化症
ハンチントン舞蹈病	ウィリス動脈輪閉塞症	ウェゲナー肉芽腫症	突発性拡張型心筋症	
シャイ・ドレーガー症候群	表皮水疱症	膿疱性乾癬	広範脊柱管狭窄症	
原発性胆汁性肝硬変	重症急性膵炎	突発性大腿骨頭壊死症	混合性結合組織病	
原発性免疫不全症候群	特発性間質性肺炎	網膜色素変性症	クロイツフェルト・ヤコブ病	

4. 生体反応の誤解が広がるきっかけ

< 斎藤章理論 > 生物学的二進法

白血球には顆粒球とリンパ球の二大細胞群があり、顆粒球は粒子の大きな細菌を貪食で処理し、リンパ球は粒子の小さいウィルスなどの微生物を免疫で処理する

顆粒球と細菌の戦いは化膿性炎症となり、交感神経が優位の体調になることであり、逆に、リンパ球とウィルスの戦いはカタル性またはアレルギー性炎症となり、副交感神経優位の体調となる

消炎鎮痛剤はリンパ球の炎症には特効薬でも、顆粒球の炎症に対しては増悪剤である

気管支喘息は気管支の慢性炎症なので、抗炎症剤であるステロイドの入った吸入が第一選択肢であるということの誤り
ステロイドホルモンは抗炎症剤であるとは一概に言えない。組織に残った場合には酸化コレステロールとして激しい炎症を引き起こすからである

医学の進歩と難病の変遷

今日残された難病の多くは自律神経の破綻から始まっている。自律神経系の破綻は生体エネルギー系の破綻と言い換えられる

5. 外界刺激と生体反応

気圧の年内変化と白血球

免疫系の年内リズム

気温、気圧の変化によって免疫系はリズムをつくる

アルミニウム、カドミウム、ストロンチウム、ゲルマニウム

カドミウム中毒 - イタイイタイ病

ゲルマニウム泉やラジウム泉は陽イオンによる副交感神経刺激作用によって身体を休める効用

蛍光物質は精神を安定させる

入浴剤のなかの蛍光物質

赤外線、紫外線、放射線

イオンと殺菌

フリーラジカル e^- 酸素イオン O_2^- 水酸化物イオン OH^- リン酸イオン PO_4^{3-} 硝酸イオン NO_3^- などの陰イオンは生体分子を酸化し、交感神経刺激状態をつくる。そして顆粒球増多症を引き起こす

メタノールやエタノールは消毒剤として使用されるが、交感神経緊張をもたらす陰イオン群は多量だと蛋白変性を起こし、消毒剤や組織の固定剤として働く

塩素イオン Cl^- はさらに消毒作用が強く、漂白剤や殺菌剤として使用される。

H^+ 水素、 Na^+ ナトリウム、 K^+ カリウム、 Ca^{2+} カルシウム、 Mg^{2+} マグネシウム、 Fe^{2+} 鉄、 Cu^{2+} 銅、 Zn^{2+} 亜鉛、 Hg^{2+} 水銀、 Pb^{2+} 鉛、 Ag^{2+} 銀、などの陽イオンは生体分子に対して還元剤として働き、分子を鎮静化し、副交感神経緊張状態をつくる。そしてリンパ球増多症を誘導する。

過剰な陰イオンも陽イオンも、生体にとって危険なゆえに、ともに消毒剤、殺菌剤として働くことになる

重金属中毒の本態

微量元素欠乏症

甘草について

甘草の主成分を精製したものがグリチルリチン - 肝臓や蕁麻疹治療に使用され、この他胃潰瘍、皮膚病、アレルギー疾患にも使用されていた

白血球の分布は自律神経系のレベルと対応しているが、自律神経系のレベルは生体における酸化還元反応のレベルでもある。エネルギーを消費する = 生体内物質の酸化 = 状態が交感神経刺激であり顆粒球増多を招く。逆にエネルギーを蓄積する状態、つまり体内物質の還元 = 生体内物質から酸素を奪う = 反応が副交感神経を刺激し、リンパ球増多を誘導する。

甘草は酸化促進状態にある人 = 顆粒球人間 = からはその側鎖で酸素を奪い、還元促進状態にある人 = リンパ球人間 = にはその側鎖で生体を刺激し、白血球や自律神経に偏りがある人を正常化する
他人のリンパ球移入で末期癌が治ることがあるメカニズム

6. 生体反応と破綻

多細胞生物の諸機能は自律神経によって同調されている。

言い換えれば、自律神経のレベルとはその個体が、今エネルギーを消費しているのか、エネルギーを蓄積しているのかというその状態のことである

生体の酸化還元反応の原理

子宮は交感神経支配のみ

酸素と生体防御

酸素欠乏症に最も弱いのは脳のニューロン（神経細胞）であり、数分の呼吸停止で細胞の変化が起こり死に至る。

不安によって起こる酸素欠乏のあとにくる反射は、過呼吸症候群である。

多臓器不全のメカニズム

大手術と顆粒球増多

癌患者の免疫能

癌の化学療法を行うと、癌組織の縮小とともに骨髄機能が激しく低下する

発癌は遺伝子の異常を伴うといっても、その異常を誘発する原因のかなりの部分は、その人の交感神経緊張状態の持続が引き金となっている

7. 病気をさらに知る

扁桃と中垂の類似 - リンパ組織

心身症の治療 - 絶食療法

白血球の日内リズム

顆粒球やリンパ球の増加は、骨髄をはじめとした全身性の同調した反応として起こるものである

急性の腎炎、膵炎と顆粒球

ストレスが肉体的なものではなく精神的なもの場合は、顆粒球の標的臓器が腎臓、膵臓、肺よりも胃、小腸、肝臓、結腸などの消火器にかたよる傾向がある

傷負け体質

ケロイド体質

健康と長寿について

エネルギー代謝や顆粒球の働きによって放出される活性酸素の三つの作用

活性酸素によってDNA傷害が起きる

上皮細胞破壊の結果、細胞再生が促されることにより細胞増殖の機会が増え、と相俟って増殖因子関連の遺伝子（癌遺伝子）の活性化をもたらす傷害が起きる

顆粒球増多、リンパ球減少によって免疫監視能力が低下し、老化細胞や癌細胞を見逃してしまう

膠原病、自己免疫病に対するステロイド治療の検証

自己免疫疾患は免疫抑制極限状態

8．私の提唱する免疫学

老人の免疫力

老化とは免疫学にとって外来抗原向けシステムから内部監視システムへのスイッチと理解すべき